

聞名仏教

第 124 号 毎月発行
(発行日) 2021 年 1 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

不安の世を生きる

戦後、核開発による核兵器の拡散や原子力発電の事故などによって核の脅威が強調されるなかで、CO2 によるオゾン層の破壊によって異常気象が起り、暴風、洪水、干ばつ、森林破壊などで人類生存の危機が叫ばれてきました。

戦後、核開発による核兵器の拡散や原子力発電の事故などによって核の脅威が強調されるなかで、CO2 によるオゾン層の破壊によって異常気象が起り、暴風、洪水、干ばつ、森林破壊などで人類生存の危機が叫ばれてきました。

そしてここ一年の間は、新型コロナウイルスによって世界中の人が生命の不安にさらされてきました。これは四十年ほど前から、エイズ、エボラ出血熱、サ

南無阿弥陀仏を親鸞聖人は、「撰取不捨の真理」を表した「撰取不捨の真言」と了解されたといひます。

撰取不捨の真理とは万人に与えられている永遠普遍の真理であり、真実の用(はたら)きであります。

ロナ、あるいは鳥インフルエンザなど、すべてウイルスによる感染症で、今後また新種のウイルスが発生し流行する可能性は大であります。

「撰取して捨てない」阿弥陀仏の用きに私たちは一人一人すでに撰め取られているという有り難い真実です。

この世界はいつまでたっても不安はなくならず、不安な世界と人生の中を生きることが余儀なくされてい

阿弥陀仏は「智慧と慈悲」といのちのはかりなき功德であって、この徳用は今この私に用いていてくださ

います。この阿弥陀仏のあたたかいのちに於て人は生まれ、このいのちの中に生き、働き、

無阿弥陀仏です。それが、お念仏となって、口に称えられ耳に聞かしめられます。南無阿弥陀仏の一声一声は、阿弥陀仏が「ここにいて、汝とともにいる、汝を全面的に引き受けている」との大悲の喚び声であります。

その中で終わっていく。阿弥陀仏のあたたかいのちを離れて人は一瞬も生きることも動くこともできません。どんなにこの世界が動揺し、何が襲ってきても、阿弥陀仏の大悲のいのちから私を切り離すことはできない。私が死ぬということもこの阿弥陀仏のいのちの中の営みです。要するに阿弥陀仏の大悲のいのちに、だれでもいつでもどこでも、何が起ころうとも、抱かれています。これが、それが撰取不捨の真理であります。この驚くべき有り難い事実を告げ知らせる言葉が南

さまざま不安は、それを縁としてお念仏を称え聞いていく生活において、阿弥陀仏が私のいのちの親(主体)であることをその都度知らせてくださる大事な縁となつてくださいます。不安な人生のただ中を、用心しつつ、またいたずらに怖れず、常にまします阿弥陀仏と共に、少しでも安らかに平和な世の中になるように生き抜いていきたいものです。

謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

令和三年元旦

土井紀明 中村穂積
土井眞由実 宮野勲
中川政二 吉田徳子

(了)

ソノママなりのお助け

私たち凡夫を平等に救いたもう阿弥陀仏の救済のこ
とをよく「無条件の救済」
とか「そのままのお助け」
とか「マルマルのお救い」
とかいわれます。なぜそう
いうことがいえるのだろうか
かという問いが当然起こり
ます。

それについては、悟りを
開かれて真実を語られた釈
尊の説法の中に説かれてい
ます。

その説法とは無量寿経を
根本とした浄土の三部経の
説法です。なかでも佛説無
量寿経に釈尊は、阿弥陀仏
が一切衆生を平等に救いた
もう法が説かれています。
無量寿経には次のように
説かれています。

ごく端折つて申しますと、
昔ある国王が世自在王仏の
説法を聞いて非常に感動し、
国王としての財産も権力も
捨てて、法藏菩薩という修
行者となつて、さとり道の

を求められました。そして
一切衆生を仏に成したいと
願われ、どうしたらそれを
実現することが出来るかを
五劫の間思惟して、その道
を見つけ、それを四十八通
りの願として打ち建てられ
ました。そしてもしこの願
を成就して一切衆生を仏に
為し得ないようなら自分は
仏にはならないとまで誓わ
れました。それを法藏菩薩
の四十八願と申します。

さて、どのような菩薩も
四つの願を起こされます。
四弘誓願といひまして、そ
の第一番目の願は「衆生無
辺誓願度」で「衆生を無辺
に誓つて度せんと願ず」で、
一切衆生を限りなく済度(救
う)しようと思つて願です。
これが菩薩の基本的な願で
あって、どの菩薩もこの願
に沿つて修行を続けて仏に
なられました、それが諸仏
です。

法藏菩薩も菩薩ですから
当然四弘誓願があります。が、
しかしそれに加えて特別な
願を起こされたのが四十八
願です。しかも四十八願の
中で、特別に大事な願が四
十八願の根本である第十八
願であり、これを「別願中
の別願」とも云われていま
す。ここに「そのままのお
助け」が誓われています。
こうして四十八願を修行
成就して法藏菩薩は現に仏
(阿弥陀)になつておられ
る、と無量寿経に説かれて
います。

その無量寿経の第十八願
ですが、これは、
「たとひわれ仏を得たらん
に、十方の衆生、至心信樂
して、わが国に生ぜんと思
ひて、乃至十念せん、もし
生ぜずは、正覚を取らじ。
ただ五逆と誹謗正法とをば
除く」
です。善導大師は、この中
の「乃至十念せん、もし生
ぜずは、正覚を取らじ」に
一切の衆生救済の要法があ
ると見て、第十八願を、
「もし我成仏せんに、十方

の衆生、我が名号を称せん、
下十声に至るまで、もし生
まれずは正覚を取らじ」(本
願加減の文)

と表され、そして「かの仏、
いま現にましまして成仏し
たまえり。当に知るべし。
本誓重願虚しからず、衆生
称念すれば必ず往生を得」
と説かれたのです。

法然聖人はこの善導大師
の指南によつて十八願の思
し召しを頂かれ、ここに一
切衆生が平等に救われる法
があると受け取られたので
す。まさに、この本願加減
の文に「無条件の救済」と
か「そのままのお助け」と
か「マルマルのお救い」が
明らかに示されているので
す。

それはどのように示され
ているかという点、十八願
文の「乃至十念せん、もし
生ぜずは正覚を取らじ」と
いう願文の「十念」は十回
の称名念仏のことであり、
それに「乃至」とついでい
るのは、称える念仏に数を
限定しないということを表
しています。こうして「乃

至十念せん、もし生ぜずは、
正覚を取らじ」を善導大師
は「たった十声なりとも念
仏申すばかりで、浄土に生
まれぬようなら私は仏(正
覚を取る)になりません」
と誓われた、と受け取られ、
そこを「我が名号を称せん、
下十声に至るまで、もし生
まれずは正覚を取らじ」と
表されたのです。

ということとは、法然聖人
によりますと、法藏菩薩は
衆生が浄土に生まれる行を
「称名念仏」の一行と選り
定め、しかも「乃至十念」
で「十声でも一声でも念仏
申すばかりで往生させよう」
と誓われたと仰せられます。
この如来法藏のお誓いの
心は、人間の側に何一つ条
件を付けない、「そのままな
りでタスケル」とのお心を
表されたのであります。こ
うして、この願成就して法
藏菩薩は阿弥陀仏になつて
おられるのです。
「乃至十念せん、もし生
ぜずは正覚を取らじ」はつ
づめるところは「一声称え
て往生す」(宗祖「ご消息」)

との誓いですから、もうこ
うなると私たちを浄土に往
生させるのに何の条件もつ
けない、まったく「ソノママ
ナリデ救う」のお心という
ほかはありません。

如来法藏様は、私たちに、
往生のためには、戒律を持
てとも、善を行えとも、心
を正せとも、仏教の道理を
理解せよとも、座禅瞑想し
て心を統一せよとも、浄土
を理解せよとも、煩惱をな
くせとも、疑いを晴らせと
も、信心を起こせとも、百
回千回念仏を称えよとも仰
せられていません。つまり
人間の側に何も要求されな
いのです。

それは、人間は浄土に生
まれることができるような
能力も資質もなく、清浄真
実な心もなく、いつまでも
流転を重ねる外ないものと
見られ、それゆえにそうい
う者なればこそ丸々引き受
けて救おうと立ち上がられ
たのが法藏菩薩だからです。
ここに私たちの救済が示さ
れているのです。このお心
が「我が名を一声たりとも
称えるばかりでタスケル」

との仰せになつてくださつ
ているのです。

しかるに「一声となえる
ばかりで」と言われること
を聞いて「一声称えなけれ
ば助けてくださらぬのか」
と受け取るのは、まだお助
けを外から眺めているから
であり、また他に道がある
と思つているからです。

「我が名を称えよ」のお
言葉に「そのままなりで助
ける」という阿弥陀仏のか
ぎりなき憐れみのお心があ
ふれているではありません
か。

ここのとてを法然聖人
の『西方指南鈔』には、
「念仏を申して往生を願は
ん人は、自力にて往生すべ
きにはあらず。たゞ他力の
往生也。本より仏のさだめ
おきて、わが名号をとなく
るものは、乃至十声・一声
までもむまれしめたまひた
れば、十声・一声念仏にて
一定往生すべければこそ、
その願成就して成仏したま
ふと云ふ道理の候へば、唯
一向に仏の願力をあおぎて

往生おぼ決定すべきなり。」
とおっしゃっています。こ
こで「唯一向に仏の願力を
あおぎて往生おぼ決定すべ
きなり」と仰せられるのは、

「一声称えるばかりでタス
ケル」という驚くべき大悲
の思し召しを聞いて「ああ
ありがたい、こんな者を。
ナンマンダブツ」とお受け
するばかりということでは

ですから、阿弥陀仏のご
本願の「まるまるのお助け」
「そのままのお助け」とい
うことが出て来るのは、第
十八願の「乃至十念 若不
生者 不取正覚」の誓いが
成就しているからです。こ
う仰せられるのが法然聖人
の仰せであり、当然親鸞聖
人もそれを受け継いでおら
れるのです。宗祖はご自身
のご信心を表白される時、

「親鸞におきては、ただ念
仏して、弥陀にたすけられ
まいらすべしと、よきひと
のおおせをかぶりて、信ず
るほかに別の子細なきな
り。」
といわれ、また『ご消息』
には、

「弥陀の本願ともうすは、
名号をとえんものをば極
楽へむかえんとちかわせた
まいたるをふかく信じて、
となうるがめでたきことに
てそうろうなり。」

と仰せられています。ここ
で「ふかく信じて」という
のは、「我が名を称えよ」と
の仰せのままに、「ああ有り
難い、ナンマンダブツ」と
そのまま受け取るほかには
ないということでは

しかるに後代、「そのまま
のお助け」は、第十八願の
「乃至十念」には特にふれ
ず、

「法藏菩薩が（十方衆生
若不生者 不取正覚）（十方
衆生、もし生ぜずは正覚を
取らじ）と誓つて、十方衆
生が往生しなかつたなら仏
にならないと誓つた法藏菩
薩が永い間修行されてすで
に仏となつておられる。そ
してその功德を南無阿弥陀
仏に込めて、私たちに南無
阿弥陀仏と喚びかけて（汝
の往生の因はすべて仕上が
つている、そのままなりで
助ける）と仰せくださつて

いる、それを信じるばかり
で助かる」

と説かれることが多くなり
ました。
なるほどそこに無条件の
救いが説かれていともい
えましよう。ただ諸仏もす
べて菩薩の時「衆生無辺誓
願度」の誓いを建てて「衆
生をかぎりなく済度したい」
と誓願され、すでに仏にな
つておられます。ところで、

『教行証文類』（行巻）には、
「法相の祖師、法位の云わ
く、諸仏はみな、徳を名に
施す、名を称するは、すな
わち徳を称するなり。徳、
よく罪を滅し福を生ず。名
もまたかくのごとし。もし
仏名を信ずれば、よく善を
生じ悪を滅すること、決定
して疑いなし。称名往生、
これ何の惑いあらんや」
とあつて、諸仏も衆生無辺
誓願度の願行によつて修行
成就した功德を名に施して
おられる。そうすれば、諸
仏の名号でも衆生が助かる
ともいえましよう。そうす
ると諸仏の名号も阿弥陀仏
の名号もたいした違いはな
いということになります。

こういう問題があったので、法然聖人は阿弥陀仏の名号が諸仏の名号に勝れているのは法藏菩薩は「乃至十念 若不生者 不取正覚」と特別に誓っておられ、それを成就された名号だからと言われています。そして、この誓いがなかったら仏の名号を称しても無明が破れないとまで云われています。

そのことに関して『西方指南鈔』に法然聖人は、「阿弥陀佛の名号は餘仏の名号に勝れたまへり、本願なるがゆへなり。本願に立たまはずば、名号を稱すとも、無明を破せざれば、報土の生因となるべからず、諸佛の名号におなじかるべし。しかるを阿弥陀仏は、乃至十念 若不生者 不取正覚」とちかひて、この願成就せしめむがために、兆載永劫の修行をおくりて、今已に成仏したまへり。この大願業力のそひたるがゆへに、諸佛の名号にもすぐれ、となふれば、かの願力によりて決定往生おもするなり。」と仰せくださっています。それゆえ「乃至十念 若不生

生者 不取正覚」の誓いこそ、一切衆生を「ソノママナリ デタスケル」という誓いであつて、それを成就しての南無阿弥陀仏の名号であるから、南無阿弥陀仏を称え聞く時「ああ、これなりで助けて下さる」と受け取られるのです。

しかるにこの十八願文の「乃至十念 若不生者 不取正覚」の「乃至十念」は信後の報謝の称名であるとか、あるいは信心の表れであるとかいう解釈がなされてきました。したが、それなら、一切の衆生を平等に救うという阿弥陀仏の世に超えた、諸仏の救いに超えた、特別な救いは十分明瞭にはなりません。ですから「乃至十念せん、もし生ぜずは正覚を取らじ」の誓いは非常に大事な誓いだといえます。そこで宗祖は『唯信鈔文意』に、「乃至十念 若不生者 不取正覚」といふは、選択本願の文なり。この文のころころは、乃至十念のちかひの名号をとへん人、もしわが

くにに生れずは仏に成らじ」とちかひたまへる本願なり。乃至はかみしもと、おほきすくなき、ちかきとほきひさしきをも、みなをさむることばなり。多念にころろをとどまるころろをやめ、一念にとどまるころろをやめんがために、未来の衆生をあはれみて、法藏菩薩のかねて願じまします御ちかひなり。よくよくよろこぶべし、慶樂すべきなり。」

とか『一念多念文意』に、「本願の文に、乃至十念」と、ちかいたまえり。すでに「十念」とちかいたまえるにてしるべし、一念にかぎらずということ。いわんや「乃至」とちかいたまえり、称名の遍数さだまらずということ。この誓願は、すなわち易往易行のみちをあらわし、大慈大悲のきわまりなきことをしめしたまうなり。」と示され、「乃至十念せん、もし生ぜずは正覚を取らじ」の誓いは大慈悲の極まりなおい心であると感動をもつて記されています。(了)

【住職雑感】

昨年十二月は二つの教会でクリスマスコンサートを聴いた。大阪の天満教会と近くの聖光教会である。天満教会では念佛寺に縁のあるプロの演奏家夫妻が出演するのでご招待に預かった。バッハの「音楽の贈り物」が最初に演奏されたが、フルートの音色が際立ってよかった。バッハの曲はリズムがとても躍動的で自然に体が動く。聖光教会ではバッハの曲が三曲、中でもグノーのアベマリアに心を打たれた。これはグノーがバッハの平均律クラヴィーアに加えたもので、深い情感を奏でる。アベマリアと言えば、今まで知らなかったが「ヴァピロフ」(カッチーニ)作曲のものがあつて、youtube でオランダの少女がソプラノで歌っていた。技巧がなく浄らかでも美しい。これを聴いているとマリア様の悲愛が胸に伝わってくる。深い感情というものは魂の深部に流れ込んでくるが、アミダの救

いはアミダの大悲の情を聞くことによつて、この情が私たちの心に伝わり私たちに信心として起るのではなかるうか。(了)

2021年度 年忌表

1	周忌	2	年没	2	年没	2	年没	2	年没	2	年没
3	回忌	7	年没	21	年没	17	年没	11	年没	9	年没
7	回忌	7	年没	17	年没	11	年没	9	年没	7	年没
13	回忌	17	年没	17	年没	11	年没	9	年没	7	年没
17	回忌	23	回忌	27	回忌	33	回忌	33	回忌	33	回忌
23	回忌	27	回忌	33	回忌	33	回忌	33	回忌	33	回忌
33	回忌	33	回忌	33	回忌	33	回忌	33	回忌	33	回忌
50	回忌										

《遠方法話予定》

二〇二一年一月十七日
講題「聞名の佛道」
午前十時〜十二時
大谷派名古屋別院（信道会館）
（電0523233868）
（コロナの影響で岐阜別院の法話は中止になりました）

『近代教学と伝統宗学の接点』を出版。

大阪教区での同人誌「朋友」に掲載しましたものと、さらに二編を加えて、私家版で出版しました。ご入り用の方がございましたら、お送り致します。

住職